

特集

新 知 故 温

～『知恩』とともに、今を生きる（特別編⑤）

「昭和百年」に寄せて先達のことばに学ぶ



昭和24（1949）年に創刊の『知恩』誌上では、法然上人の浄土宗開宗の慶賀に寄せて、幾多の先人たちがさまざまな珠玉のことばを残しています。前回（本年3月号）は哲学者で仏教学者、比較思想研究の第一人者だった中村元氏（1912～1999年）の50年前の講演を紹介し、釈尊から法然上人に至るダイナミックな仏教思想の流れをあらためて学びました。今回は今から64年前の昭和36（1961）年、法然上人の七百五十年大遠忌の年に出た大遠忌記念号などを飾ったことばの数々に触れてみましょう。

（編集部）

●思想的超人としての法然上人に学ぶこと

昭和史の流れでみても昭和36年頃はやはり大きな節目の中がありました。前年の昭和35年は、いわゆる60年安保（1960年の日米安全保障条約の改定年）で国会周辺を取り巻く数次にわたる大規模デモがあり、東大生樺美智子さんが警官隊との衝突の際に死亡（6月15日）するなど戦後最大の騒然たる動きのなかにあり、その秋には自民党政権と対決していた日本社会党（当時）の浅沼稻次郎委員長（1898～1960年）が日比谷公会堂での3党派首立会演説会で演説中に17歳の少年に刺殺される事件（10月12日）までありました。

この時代背景のなか、安保改定当時の岸信介首相（1896～1987年）は「私は『声なき声』に耳を傾ける」「安保改定が国民にきちんと理解されるには50年かかるだろう」といった言葉を残しています。岸首相は改定実現とともに7月に退陣。後を受けた池田勇人首相（当時、1899～1965年）が国民の「所得倍増」を打ち上げて、戦後日本は政治の季節から経済の季節へ大きく舵を切ったのが昭和36年だった印象があります。